

「なぜ、この私に」

Ⅱ列王記 20:1-12

【1】序

今日はヒゼキヤの生涯の最後、第8回目になる。ヒゼキヤの生涯を順を追って見ていく時、彼はアッシリアの脅威（目に見えるこの世の問題）とイザヤの語る神のことば（霊的な問題）との間で揺れ動いていることがわかる。ここに信仰者の霊的な戦いを見るのである。その姿は、まさにこの世を生きる信仰者のありのままの姿であり、決して現代を生きる私たちとかけ離れたものではない。

信仰者は、主権者であられる神のみわざを理解し、見ることができる。神を認めるまで理解できなかった物事に目が開かれていく経験をする。そこにある罪との葛藤、苦しみ、喜び、それらすべてをへりくだって神のもとに置く時、神の支配と配慮を理解するのである。神の聖霊とみことばは、私たちが内外において飾ってわからなくなっている自分自身を探るのである。一つ一つの物事を通して私たちは神との関係を深めていくのである。

ヒゼキヤはその生涯に渡って主に忠実であろうと信仰を働かせてきたが、完璧な信仰者ではないことがわかる。しかし、主はその主権を持って選びの器として彼を導き、そこに力ある主の御業を現されたのである。一人の信仰者の生涯を通して、私たちはすべての人や物事を支配しておられる神に注目させられる。そして、この神の豊かな愛と憐れみに注目させられるのである。

【2】ヒゼキヤの病と祈り

今日の聖書箇所はⅡ歴代誌 32 章、イザヤ書 38-39 章と並行している。ヒゼ

キヤは、王になって14年、39歳のときに死に至る病にかかった。この時、同時にアッシリアの脅威に直面していたのである。この大きな問題である一連の出来事は、神の特別な恵みの表れとして描かれている。このことを通して主の主権が明らかになった。

ヒゼキヤの涙の祈り(3)は、危機の中に生きる信仰者の切迫感そのものである。主の主権を理解しながら、どうして今、この時なのか理由を問う祈りでもある。重責を負いながらも彼は、病の中すべてを主に委ねるしかなくなったのである。このことを通して、主はご自身の栄光を現され、約束の確かさを示されたのである。彼は、ただ主のあわれみによって回復と延命が与えられた。回復の方法は極めて単純、その印は極めて大胆な出来事であった。

【3】バビロンからの訪問者

回復を得たヒゼキヤのもとにやって来たのは、大国バビロンからの遣いであった(12)。大きな試練を乗り越えた後、そこにできたスキにサタンは付け込んだ。ヒゼキヤは主の力ではなく、迫るアッシリアの脅威に対してバビロンを頼りとし、自国の力を誇ったのである。神は確かに「わたしが…救い、守る」(6)と約束しておられた。このことばを聞きながら同時にバビロンを頼みとしたのである。ここに人の罪の根深さを知る。ヒゼキヤの不信の罪こそ、イスラエル、ユダのこれまでの歩みの中で主を悲しませ、怒らせてきた原因であった。この罪がバビロン捕囚という懲らしめへと至らせたのである。

ところが、神はこのような罪人を何度も顧み、救われた。それは、ご自身の約束と愛によるものである。神はなぜ、この私を救われたのだろうか。